

## 尾崎富衛先生と杵差岳

高橋庄一

終戦から三年が経過し、学制が旧制から新制の学制と大きく変化した。

戦後間もない頃で世の中は未だ混乱し混沌とした時代であった。昭和21年に新潟市立山潟尋常高等小学校、高等科を卒業した。新制の高校へ入るには受けた教育年限が一年足りないから検定試験を受けなければならないと言われ、検定試験を受けた記憶がある。

昭和23年6月10日新潟市立新潟高校定時制課程の石山分校へ入学した。6月の入学は混乱期の為に6月入学となったのであろう。

入学した時、受け持たれた先生が尾崎富衛先生であった。軍隊から復員されて間もない頃で毎日、軍服姿で教壇に立っておられた。

戦後の物資不足の時代のせいか、満足な教科書もなく、尾崎先生の授業のテキストは野口弥吉著「栽培原論」、阿部達平先生の化学のテキストは津田栄著「無機化学通論」であった。教科書が無かったのか先生がこれを教科書にするから本屋へ行って買ってくるよう言われた時代であった。

尾崎先生の授業は余談が面白く、定時制のことでもあるから蘭汁、微生物の実験でドブコクを仕込み先生と生徒で利き酒をやり、前後不覚に酩酊した記憶もある。ロクスポ勉強もせずに4年間、毎晩学校に通い悪さばかりしていた。

三年の夏、尾崎先生から生物部で、飯豊の杵差岳へ植物採集に行かないかと提案された。

杵差岳なる山は何処にあるか、どこから行くのか、皆目見当もつかない。昼間、東の方角に見える高い山の続きで一番左手の山が杵差だから良く見ておくよう言われた。

登山の知識も無く、何が何だか訳判らないうちに出発の日がきた。

早朝、亀田駅まで歩き、汽車に乗り越後下関で下車、どこでどう乗り換えたかは全く記憶に無い。

下関駅からは全行程歩きであった。大石部落を通り西俣川添いに歩き、日暮頃、大熊平の大熊小屋に到着した。途中、枝沢には橋は全く無く、丸太を渡したのが橋代わりで、最初に尾崎先生が、丸太を跨いで手を突き乍ら渡り、細引を渡した後で全員が渡ったことを憶えている。

途中の山道が難儀で大熊小屋へ到着してホットしたのは憶えている。持参の握り飯を食べたら元気が出たが、ガス欠でエンジンが回らなっただけである。夕食後小屋で騒いでいたら、「明日は早いぞ、早く寝ろ」と先生に注意されたことが記憶にある。15~6才の遊び盛りの若者である。軍隊の毛布をかぶり乍らのおしゃべりは夜遅く迄続いた。

翌朝、夜明け頃小屋出発、小屋近くの大熊沢を渡り、大熊屋根に取りつく、大熊平の鬱蒼たるブナ林は強烈な印象として今も脳裏にある。また大熊平は頃の産地で、ここにも、ここにもと5~6匹の蝮を見たのも強く脳裏に刻まれている。後年大熊小屋で柴犬を連れての蝮取りの人と同宿したことがあるが、小屋の片隅にうごめく蝮の入った紺の木綿袋は不気味であった。

蝮取りの話では繁殖期に頃の集団見合があり、その時期を狙えば効率良く捕れるとのこと。集団見合いの蝮を地元では、「かたまり蝮」と言っているそうである。

急な痩せ尾根の大熊尾根を喘ぎ乍ら、途中一杯清水で水を補給して登る。一の峰から三の峰を経て、いつも写真の材料になる「新六の池」の脇を通り、最後の登りを登って山頂に到着。山頂には三角点以外、何も無かったように記憶している。

山頂には赤トンボが沢山おり、空中を飛んでいる赤トンボを簡単に手で捕まえることが出来た。山頂で昼飯を摂る。昨夜、炊いた飯盒の飯は旨かった。パパサが作って持たせてくれたナンバン味噌をおかずで飯盒の飯を半分以上平らげたら「お前は良く食うな」と先生が吃驚されたのを憶えている。

戦後で今のように食べ物が豊富な時代でなく、米と味噌は自家生産していたから充分あったが他には何も無く甘い食べ物に飢えていた時代で、腹が減ると握り飯に味噌をつけて食べていた時代で、オクタン価の低いガソリンで燃料タンクを大きくしておかなければエンジンが回転しない時代であった。

山頂よりいつも写真の材料になる新六の池の脇を通り下山。その頃は未だ新六の池の名前は付いていなかったように記憶している。大石の高橋千代吉氏の祖父、加藤新六を記念して付けられた名前である。新六氏にはお会いしたことはなかったが、千代吉の母親も千代吉氏ももうこの世にはいない。千代吉の伴、賢吉氏も山登りに一生懸命で新六氏、千代吉、賢吉と続く山登り一家である。

大石の高橋家には大変ご厄介になり、未だ訪れる度に寄せて頂き千代吉の奥さんと昔語りをしている。

大熊小屋に夕方到着、小屋脇で飯を炊き、小屋泊り、夕食のとき尾崎先生持参のコブ巻きのおかずを頂戴したことをどうゆうわけか鮮明に記憶している。

翌朝、朝飯後先生が「今日もう一回頂上迄登って来る、一緒に行く者は付いて来い」と言われたが小生は疲れていたのでパスし、終日大熊平でぶらぶらして過ごした。渡辺喜好君が付いて行ったのは記憶しているが他に誰が同行したかは全く記憶にない。昔からの仲間渡辺喜好君も事故死して鬼籍に入ってしまった。

大熊小屋で三泊し、西俣川添いを下山、途中枝沢を渡るのであるが橋は一本も架かっておらず、丸太が渡してある

だけで、先生が丸太をまたぎ手を突き乍ら向こう岸に渡り細引きを張って全員が渡った。

高さのある丸太の一本橋は恐かったのを憶えている。

現在のように登山道は整備されてなく、かなり危険が伴う登山に12~3人の生徒を連れて登る。先生も当然若く、血気盛んな頃であったから出来た登山であったと思う。

以来、約50年の間に杵差の頂上に立ったのは4~50回位であろうか、尾崎先生と共に頂にお参りしたのは15~20回位はあったと思う。

最後に先生と共に杵差山頂に立ったのは平成11年8月上旬のじねんじょの合宿の際であった。

先生のお宅へおじゃました時、「これ今生の思い出に飯豊へ登ってみたい、それについては俺の荷物を持ってくれる山岳会の若手2人程、心配してくれ」と先生から依頼された。岐阜山岳会の例会に行き若手会員に話してみたが、みんな自分の山行に忙しく、そんな年寄の相手をしている閑は無い、とつれない返事である。

8月上旬であれば先鋭的な沢登りをやっている若手会員には大事な季節で沢の記録を創るのに忙しいであろう先生に若手を頼むのは無理と返事をしたところ、「気心のしれたあんたが一緒に行ってくれるのが一番良い」とのことで一緒に登ることになった。じねんじょの夏期合宿に便乗して登ることにした。先生75~6才、小生67才、まさに老人クラブの登山である。中高年の登山ブームと言うのが我々は老老年でお世辞にも中年とは言い難い。日程、行程を検討し、初日本隊は東俣川の下流に幕営とのことであるが我々老老年のパーティーは一步でも頂上に近づく為、三吉峰を越えてカモス橋付近でツェルト泊まりとすることにした。

8月5日先生のお宅へ迎えに行き、東俣川沿いに車を走らせる、ブナイデの橋で林道は終わり、車を捨てる。ブナイデは蛇の名所でここで休む気にはなれない。三吉峰を越えカモス橋手前の東俣川右岸でツェルト泊り、三吉峰で先生にウリノキを初めて教えていただいた。

ツェルトを張り、初日のことで持参の食料で夕食、食後することが無いので火でも焚きますかと切り倒したのがテツカエデのかなり大きな木であったが、扇ぎ板を忘れた為うまく火は燃えなかったが焚火をし、煙を眺めていると気分が落ち着く、太古より人間は火を恐れ、憧れて火をコントロールする術を手中に収めたのであろう。狭いツェルトの中は蒸し暑く、中々寝付かれなかったが、いつしか寝入ってしまい目が覚めたら朝であった。

6日、目覚めと同時にツェルトを撤収、朝飯前にカモスの頭迄登りましょうと夜明けと同時に出発。カモスのカッチ迄の急な枝尾根はいつ来てもなんぎである。途中、若い女性が転落死した場所を探してみたが見当もつかなかった。事故後2~3年は彼女の指輪が転落現場の木の枝にハンカ

チで括り付けてあった。その指輪を誰がお下げ申してくるか、山仲間で話題になった。カモスのカッチで朝飯、今日の行程中登りのきついのはカモス迄の登りと前杵の登りで、後はだらだらの登りであるが、瘦尾根であるから足もうちの無くなった老々クラブでは気が抜けない。

登りの途中、先生はカメラ2台を駆使して草木の写真を撮っておられたが、あのカメラの構え方では心もとなく、巧く写っていたらおなぐさみである。ニコンと小型のEPSサイズの2台の写真機を一台は首にもう一台は胸ポケットに盛んに撮っておられたが写りの程は判らない。ご苦労様なことです。

本隊より先に杵差小屋へ入るつもりでいたのが前杵の登りの手前で本隊に追い付かれてしまった。老々クラブのパーティーでは止むを得ないことである。瘦せ尾根の途中で蘭らしき小さい草を見付けた。追い越してゆく白崎先生にお聞きしたら一葉蘭でしょうとの事、栽培の難しい蘭がこんな瘦せ尾根に生えているのが不思議であったが、朝夕発生する霧により空中から水分は供給され、瘦尾根で排水は問題なく、風通しは最高に良い。一葉蘭にとって案外最高に良い環境かもしれない。鉢で作ると3年位で枯死、増殖は夢の又夢、手を出さないことにしている。技術が無いのでなく一葉蘭の欲する環境が作れないだけである。昼夜の温度差、紫外線の量はどうしようもない。

歩くより休む時間が長く、休む口実に写真撮影は最高に良い。先生と付いたり離れたりの牛歩の登りが続く。冬山の杵差で、頂上よりの降りて千本峰でルートロスで中ノ股川方向へ降り、間違いに気付き、引き返し風雪のビバークを強いられた苦い経験がこの瘦せ尾根にある。50年近く前のことであるが「俺はここで死ぬのか」とふと一瞬、死が頭をよぎった。風雪のビバークの翌日、好天で助かったが、荒天であつたらこの世には存在しては居ないであろう。色々なことが思い浮かぶが、足腰が衰え、思うに任せぬ今の歩みを呪いたくなるが、これも寄る年波のせいであれば致し方ないこと。

前杵を越え、長者原を過ぎて杵差頂上、小屋迄は一投足で小屋着午後7時、約30分遅れで先生も小屋に無事到着、良かった良かった。本隊に小屋で合流、約14時間かかって杵差岳に登った、最長記録である。

30代の時、バイクで東俣林道を駆け、日帰りで頂上往復し白山千鳥、鶉葉白山千鳥の花を見に行っていた頃の体力を取り戻せたら、万金を投じてでも惜しくは無い。

小屋で酒を飲み乍ら、じねんじょの皆様楽しいお話を伺って第2日は無事終わった。

8月7日、今日下山する本隊を長者原の東端で見送る。再び来ることは無からうから精一杯、楽しみたいとの先生の要望で今日は終日、休養を兼ねて山頂部で過ごす。鉾立峰近くの巨石に埋め込んである藤島先生の肖像を見に行

く。巨石に馴染み玄さんの壽像も風格が出たように感じられた。この壽像、銘文の取り付け山行にも参加し、この壽像と銘板を埋め込む穴ほりに苦勞したことを思い出す。この巨石の質は硬く石鑿を受け付けてくれずハンマーを握る手が痺れたことを憶えている。前夜下関の荒川荘の前夜祭でホロケル程飲み、完全な三日酔いの状態で大石の千代吉さんとゲロを吐き乍らの東俣尾根の登りは辛く、更に壽像、銘板の取り付け作業、三日酔いから二日酔いと段々と回復傾向にあったが、前夜の酒が抜け切らず頭は割れる程痛く、ハンマーを握る手に力は入らず満足な仕事が出来ない筈はない、と思いながら仕事をしたのであるが改めて眺めてみると巨石に壽像と銘板が馴染み風格が出てきたように思う。これは玄さんの人柄の為せる業であろうか。

壽像が少し左に傾いて見えるのは酔っ払い仕事のせいであろう。

晩年よく行動を共にした玄さんも、山でよく仕事を一緒にした一歳年上の千代吉さんもこの世に居ない。

又、酒を一緒に飲みたい、玄さんも千代さんも20年程待って下さい、楽しみにしています。

終日、雲上の散歩で過ごす。長者原東端の大石に埋め込んである千代吉さんの銘文や亀田山岳会の「どじょうっこの詩」の記念碑を見る。冬の飯豊の初縦走に成功した立川重衛の快挙を記念して亀田山岳会が建立したもので急逝する前夜、棒目木で写真を撮った亀田の立川も死んでしまった。この碑を眺めていると虚しい気分が襲われた。般若心経にある一切が空なのか、山仲間を死を急ぎすぎる。プラス思考に切り替えることにしよう。

先生は杖を突きながら2台のカメラで花の写真撮影に余念が無い。蝦夷伊吹虎ノ尾、薊の仲間等、花は咲いているが常時風があり瞬時も花はとどまることは無い。ストロボを使えば止まるが、大体はブレるであろう。

まあ良い、先生気の済む迄写真を撮って下さい。山でこんなにのんびり出来たのは初めてで山頂の祠を改めて見る。最初に登ったときには祠は無かったように記憶しているが、何時、建てられたか知りたい。

祠のお賽銭は、お下げ申してくる程は供されておらずそのままにしてくる。世の中不景気なのであろうか。夕方小屋で今日は二人の貸切かと思っていたら夕食後、小太りの小父さんが飛び込んできた。この人の雷鳴にも似た肝に終夜悩まされた。

8月8日、今日は新潟へ帰る日である、先生何を思い出されたか、途中一ヶ所危険な場所がある。この細引で俺を確保してくれ、と梁にあった細引はずされた。そんな場所無かったかねかね、と言っても、「いやあそこは危ないどうしても確保が必要だからこの細引を持って行ってくれ」、とのこと。要らないなと思いながら仰せに従いザックに梁に渡してあった物干し用の細引を入れる。小屋に別れを告げ

出発、池塘の点在する長者原の散歩を楽しみ、振り返り杖差山頂にも別れの挨拶をする。再びこの頂に立つことが出来るだろうか、判らない。

前秋の登りはきついが、朝の気温の上がる前で助かる。後はカモスまではグラグラと降るだけ、先生の言われる危険な場所は判らず、危険な場所を探しているうちにカモスに着いてしまった。先生に危ない場所はどごらったね、と聞くと、俺も判らなかつたとの返事であった。

カモスのカッチで遅い昼食となる。昼食後一服していると下から登ってきた女二人連れに「高橋さんだねかね」と声を掛けられる。オヤと思いいく顔を見たら関川山の会の斎藤チヨさんとその連れであった。

20年前は美人の誉れの高かった彼女も、今はそれなりである。未だ山登りを続けているとのこと、立派である。これから杖差小屋迄登るとのこと、午後3時過ぎである。灯りは持っているから大丈夫と手甲脚絆姿で登って行った。地元の山岳会のメンバーであり、案ずることもあるまい。

カモスよりカモス大橋迄の枝尾根の登りも降りも仲々なんぎである。北五葉の根に掴まったり、くぐったりで毎回登りも降りも嫌な尾根である。カモス大橋無事到着、三吉峰を越えブナイデの橋を渡り、我が愛車に無事帰還の挨拶をする。ドアを開けると目白蛇の死骸が車の床に累々と敷きつめたように転がっていた。隙間より入り込んだ蛇が出られず気温の上昇と共に熱中症で昇天したのであろう。蛇の名所であることを立証したようなもので、蛇にたいして罪な事をしたものである。

蛇の死骸を掃き出し、車上の人となり車俣林道を駆ける。文明の利器は有り難い、ハンドルとアクセルの操作だけで前へ進む。足を使わなくとも前進出来る20万キロは優に越えた車でも悪路の林道を結構走る。丈夫な車で7年以上もよく走ってくれている。

公園らしくない彫刻公園付近で本隊に合流、ニコチン切れで禁断症状で苦しんでいたが、刈屋さんに頂いたゴールデンバットの一服は正に至福の一服であり、この味は煙草を吸わない人には理解出来ないであろう。

本隊の人たちにお礼を述べ帰宅を急ぐ。途中、眠気覚ましに新発田の喫茶店に寄り、コーヒーなる飲み物を飲み、一路先生の自宅に向かう。ご自宅の奥様に先生をお届けして小生の任務完了となった。一つの山行を無事終えた満足感を味わうことが出来て、良かった良かった、であった。

50年以上、お付き合いさせて頂いた尾崎富衛先生も池上先生も、既にこの世に無く、歳月の移り変りの無常を痛感させられる昨今である。未だこの世にやりたい事が一杯あるし、見たい物も一杯あり、読みたい本も一杯あり、今のところ先生とお付き合いする事は出来ません。あと15~20年したら又お付き合いさせて頂きます。暫らく持っていて下さい。 祈冥福、為富峰諦観居士 合掌。